

第16講

③ アフリカ分割

次の文章を読んで、問いに答えよ。

19世紀後半のヨーロッパでは、国内経済や列強間の政治的・外交的競合などの諸要因がからんで、列強各国は対外的な膨張傾向を示し、世界分割がすすむという帝国主義の時代に入った。こうしたなかでアフリカにおけるヨーロッパ諸列強の植民地獲得競争も熾烈を極めていくことになる。

暗黒大陸という呼称に示されているように、19世紀になるまでアフリカ内陸部は、ヨーロッパにとっては未知の世界であったが、この「未開」の土地であるアフリカ内陸部についての情報をヨーロッパ社会に提供する役割を果たしたのは、欧米の探検家たちであった。諸列強は、こうした探検家たちがもたらす情報をもとに、アフリカ内陸部へと進出していった。イギリス生まれの探検家 ① も、こうした列強の植民地獲得競争に深くかかわった探検家の1人である。アフリカで行方不明になっていた ② の救出により一躍有名となった ① は、ベルギー国王レオポルド2世の依頼により、コンゴ川流域の探検調査を行った。国王は、彼の調査結果をもとに、この地域の植民地経営に着手した。こうしたレオポルド2世の行動が契機となって、⑦ 1884年から1885年にかけて、コンゴ川流域の植民地や貿易に関する問題を協議するための国際会議が開催された。この会議の結果、レオポルド2世は、みずからの植民地の一部をポルトガルと ③ の両国に割譲することになったものの、④ その大部分の支配権を確保することに成功した。また同会議では、アフリカが「無主の地」であり、最初に実効的な占有を開始した国家が領有権を取得するという、「先占」の原則が欧米諸国間で確認された。この会議後、欧米各国のアフリカにおける植民地獲得競争は激化していくことになった。とはいえ「先占」の原則は、その後の各国の領有権主張や列強間の領土紛争において、つねに適用されたわけではなかった。1898年にスーダンで起こった ④ 事件では、④ の領有権を主張した ③ が「先占」の原則の適用を主張したのに対し、⑧ イギリスはこれを認めず、結局 ③ がイギリスに譲歩するかたちで紛争が解決されることになったのである。

ヨーロッパと非ヨーロッパとの接触の増大は、ヨーロッパ各国の国民のなかに、ヨーロッパと非ヨーロッパとの違いを認識させることになるが、帝国主義のもとでは、両者の差異は、一般的には優劣関係として把握されるようになっていった。帝国主義は、こうしたヨーロッパの優位に対する非ヨーロッパの劣位という欧米各国における大衆意識に支えられていたが、社会進化論と「文明化の使命」論という2つの思想は、そうした意識に理論的な正当性を与えようとするものであった。

社会進化論とは、ダーウィンの進化論を人間社会に応用したものである。ダーウィンは、1859年に刊行された『⑤』において、生物の進化を「生存競争」における「自然淘汰」から説明した。社会進化論は、このダーウィンの考え方を社会に適用し、人間社会にも生存競争があり、適格者が存続して劣等者が減じる運命にある、とする思想である。当初は、社会に

における自由な個人間の経済競争の意義を理論的に説明する手段であった社会進化論は、やがてその対象を個人から民族・人種・国家といった集団に広げていき、優生学や人種差別の理論的基盤を提供していくことになる。

帝国主義を支えたもう一つの時代的思潮は、[㊦] ヨーロッパによる非ヨーロッパの「文明化の使命」という思想である。ヨーロッパと非ヨーロッパとの間の文化的差異は、19世紀ヨーロッパにおける産業革命の結果、近代工業の発展によるヨーロッパの「進歩」と、その発展からとりのこされた非ヨーロッパの「停滞」、前者の「文明」と後者の「野蛮」という対立軸で把握されるようになっていった。「文明化の使命」論とは、このような対比を前提として、ヨーロッパの文明国が「野蛮」な非ヨーロッパに、ヨーロッパの「文明」をもたらす使命がある、とする考え方である。こうした思想は、②が行ったアフリカでのキリスト教布教や医療活動にみられるように、主観的には善意にもとづくものであるが、ヨーロッパと非ヨーロッパとの関係を優劣関係として捉えている点で、差別的論理を内包していた。このように非ヨーロッパを劣ったものとしてとらえる「文明化の使命」論は、文明国にはこれらの「未開」の土地と「野蛮」な先住民に「文明」をもたらす使命があり、この使命を貫徹するためにはこれらの地域を植民地化しなければならない、という論理で、欧米各国による植民地支配を正当化する論拠ともなったのである。たとえば、トンキンとアンナンを獲得し、スーダン、コンゴ、マダガスカルなどへの影響拡大をはかっていた1880年代の③は、優等人種には劣等人種を「文明化」する使命があるとして、植民地化の正当化をはかったのであった。

問1 文中の空欄①～⑤のそれぞれにもっとも適切と思われる語句を答えよ。

問2 文中の下線部㉖～㉙に関して、下記の間(ア)～(エ)に答えよ。

- (ア) この国際会議はビスマルクが主催し、欧米14カ国が参加したものであるが、同会議が開催された都市はどこか。
- (イ) 自国政府に運営を移管するまで、この植民地はレオポルド2世の私領となっていたが、この私領の名称は何か。
- (ウ) 当時この国は「縦断政策」を展開していたが、これはエジプトとどこを結ぼうとする政策か。
- (エ) 非ヨーロッパという未開の地にヨーロッパの文明をもたらすという「文明化の使命」の考え方は、文明の進歩をたたえた18世紀の思想の反映であるが、人間の理性の光に照らして事物を検討し、迷信や偏見を打破すべきことを主張して、教会や絶対王政の批判を行ったこの思想を何というか。